

よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習 ～子どもが社会とつながる授業を通して～

1 主題設定の理由

本研究主題は、急速な時代の変化や身の回りにある社会の諸問題に適切に対応し、よりよい社会の実現を目指して主体的に社会に参画するための資質・能力を育成するために設定したものである。

令和元年度の全国大会で提案された「これからの岐阜県の社会科」の理念や方向性は、令和2年度・3年度と引き継がれ、着実に県内に広がっていった。令和4年度は飛騨地区で行われた県大会を中心に、各市・各学校で様々な実践が行われた。授業の中で見えた子どもの姿や、実践者の振り返り、参観者の意見をもとに成果と課題をまとめた。

◇成果

〔研究内容1-1〕※飛騨地区大会より

- ・「魅力的な地域教材」が多く開発された。授業での子どもの姿からも、生活経験に関連した地域教材が「いかに感動やあこがれを生み出すか」ということが改めて明らかになった。

〔研究内容2-1〕※夏季研究協議会より

- ・話し合い活動中の「教師の発問」によって、社会的事象を多角的に捉え深い学びにつながる実践が行われただけでなく、資料追究時や話し合い活動の中で「思考ツール」を活用することで、「一人一人が多角的に考えられる学習活動」につなげようとする試みも行われた。

〔研究内容2-2〕※夏季研究協議会より

- ・社会への関わり方を選択・判断する学習の実践が積極的に行われ、子どもが社会への関心を高める姿が見られるようになってきた。

◆課題

〔研究内容1-1〕※飛騨地区大会より

- ・自分のこととして捉えやすい教材こそ「どのように一般化を図るか」が今後考えていくべき課題である。感動やあこがれを生み出したり、子どもたちの生活に関連したりする魅力的な教材だからこそ、「何を学ぶのか」という目標（ねらい）を明確にする必要がある。

〔研究内容1-2〕※夏季研究協議会より

- ・単元構成表に記載する内容を再度精選する必要がある。「子どもの意識の連続性」「社会的事象の見方・考え方」「評価規準」など記載すべき事項は多いが、「活用しやすさ」という視点からも再考する必要がある。

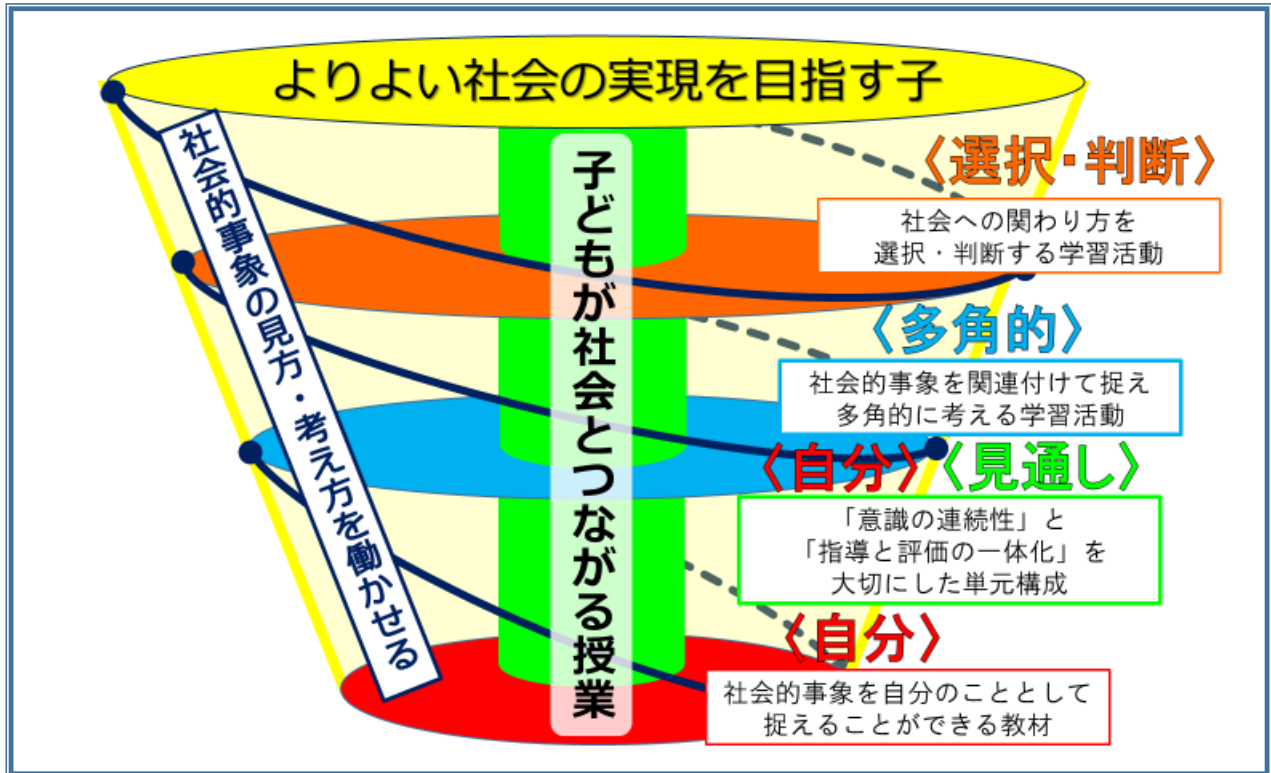
〔研究内容3-1〕※飛騨地区大会 指導者ご助言より

- ・「主体的に学習に取り組む態度」の観点で、特に「主体的に問題を解決しようとする態度」の評価については、国研から示された「指導と評価の一体化」の視点からもさらに幅広く考えていく必要がある。

例年のような研究会等が行われない中、各教員がそれぞれ学習指導要領で求められている社会科学習の在り方について考え、実践を行うことができた。自分のこととして捉えるための教材開発や社会的事象の見方・考え方を働かせることを意識した単元構成、社会に見られる課題について選択・判断する実践など、多くの成果が見られた。一方でそれらの実践にはまだまだ課題点もあり、令和5年度も継続して取り組んでいく必要がある。

特に、「単元を通じた授業デザイン」や「指導と評価の一体化」は、資質・能力の育成に不可欠な要素と言われる。本研究に当てはめて考えた時、研究内容1—2の「単元構成表」や研究内容3—1の「学習評価」については、再度見つめ直し、よりよい方向性を見いだしていく必要を感じる。以上の点から、令和5年度も、研究主題及び副主題については継続して取り組み、研究内容の一部を見直すこととした。

【図表1】研究主題のイメージ



よりよい社会の実現を目指す子とは

よりよい社会の在り方について考え、自らの生き方につなげていく子

子どもが社会とつながる授業とは

社会的事象を自分のこととして捉え、見方・考え方を働かせながら、その意味を多角的に追究したり、社会への関わり方を選択・判断したりする授業

2 研究内容

＜子どもが社会とつながる授業の具現に向けて＞

研究内容1	教材化や単元構成の工夫				
(1)	社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発	自分			
(2)	「意識の連続性」と「指導と評価の一体化」を大切にした単元構成	自分	見通し		
研究内容2	学習活動の工夫				
(1)	社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動		多角的		
(2)	社会への関わり方を選択・判断する学習活動		選択・判断		
研究内容3	指導・援助の工夫	自分	見通し	多角的	選択・判断
(1)	社会とのつながりに気付くことができる指導・援助と評価				
(2)	社会への関わり方を選択・判断する学習活動における指導・援助				

3 研究内容と方法

研究内容1 教材化や単元構成の工夫

- (1) 社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発
- (2) 「意識の連続性」と「指導と評価の一体化」を大切にした単元構成

(1) 社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発 **自分**

子どもが社会とのつながりを実感するためには、各単元で取り扱う教材を、子ども自身が「自分との関わり」で考えることが大切である。この考え方は「身近な人々、社会及び自然を自分とのかかわりで捉える」生活科の学習と通底したものであり、生活科同様「子どもの思いや願い」を生かした教材の開発を意識する必要がある。「子どもの思いや願い」を土台に教材を吟味したとき、次のような社会的事象を取り扱えば、子どもが教材を自分のこととして捉え、社会とつながる授業を具現することができると考え、【図表2】のように整理した。

【図表2】子どもが社会とのつながりを実感するための教材の在り方

	取り扱う社会的事象	社会とのつながり	教材化の留意点
①	社会に見られる課題を通して、そこへの <u>関わり方を考えることができるもの</u> 。	身の回りで起きている出来事や社会に見られる課題に対して、自分の関わり方を考える。	子どもの発達段階や学習指導要領の内容に合っているか。
②	人の生き方に <u>感動やあこがれを生み出すことができるもの</u> 。	人の生き方に感動やあこがれをもち、これからの自分の生き方や社会への関わり方を考える。	特定の人物の学習をするのではなく、一般化して考えることができるか。
③	<u>既習内容や子どもの生活経験に関連するもの</u> 。	これまでに学習した内容や生活経験を生かして、社会に対する認識をさらに広げたり深めたりする。	子どもの実態を把握し、認識を広げたり深めたりすることができるか。

子どもにとって身近な教材は、事象を提示した際の反応や資料から追究する子どもの姿は積極的・意欲的になりやすい。そのような姿を追い求めることも大切であるが、授業者は表出される姿だけでなく、目標（ねらい）を意識して授業を構成する必要がある。【図表2】の教材化の留意点にもあるように、自分のこととして捉えやすい教材こそ「どのように一般化を図るか」まで考えておくことで、真の意味で「子どもが社会とつながる」教材となり得る。

また、社会的事象を自分との関わりで捉えやすくするためには、他教科や他の領域との関連を考えて教材化を図ることも有効である。例えば総合的な学習の時間における「郷土学習」と関連させて、「住んでいる地域と自分とのつながりを考える教材」を開発すれば、総合的な学習の時間で学習したことと社会科で学んだことを関連付けて考え、より深く地域との関わりを意識することにもつながる。

このような教科等横断的な学習（カリキュラムマネジメント）の視点を取り入れた教材開発も、今後広げていきたい。

(2) 「意識の連続性」と「指導と評価の一体化」を大切にした単元構成 **自分** **見通し**

子どもが社会的事象を自分のこととして捉えるためには、「教師が一方的に描いたシナリオ」ではなく「子どもの意識の連続性」をできる限り具体的に描く必要がある。子どもがどのような「問い」をもち、どのような「考え」で社会的事象を追究していくのかを事前にできる限り想定しておきたい。その際に意識したいのが「単元の目標」や「単元の評価規準」をもとにした「指導と評価の一体化」である。やみくもに「子どもの意識や姿」だけで単元を構成しても、確かな資質・能力が身に付くと

は限らない。単元全体や一単位時間の「評価規準」を明確にした上で、子どもの意識を描くことで、一単位時間の役割、資料や発問、教師の指導・援助が明らかとなる。さらに実際の授業では、「明確な評価規準」が子どもを見取るための確かな視点となり、教師自身の指導改善にもつながる。

学習指導案作成の際に、前文と単元構成表の作成を以下のように工夫することで、「意識の連続性」と「指導と評価の一体化」を大切にした単元構想につながると考えている。(本資料のP12に「前文のフォーマット」、P13に「単元構成表の記述例」を掲載しています。図表3と合わせて見て頂くと、より分かりやすいかと思います)

【図表3】学習指導案 作成上の留意点

—前文 作成時—

【1】学習指導要領をもとに「単元の目標」を設定する。

【2】「単元の目標」を、学習活動に落とし込んだ「単元の評価規準」を設定する。

—単元構成表 作成時—

【3】「単元の目標」をもとに「学習前・学習後の子どもの意識」を設定する。

【4】「単元の目標」をもとに「単元を貫く学習問題」を設定する。

【5】第1時から順に、「問題解決的な学習のプロセス（以下参照）」を意識しながら、子どもの「問い」や「意識」を想定して授業をつないでいく。

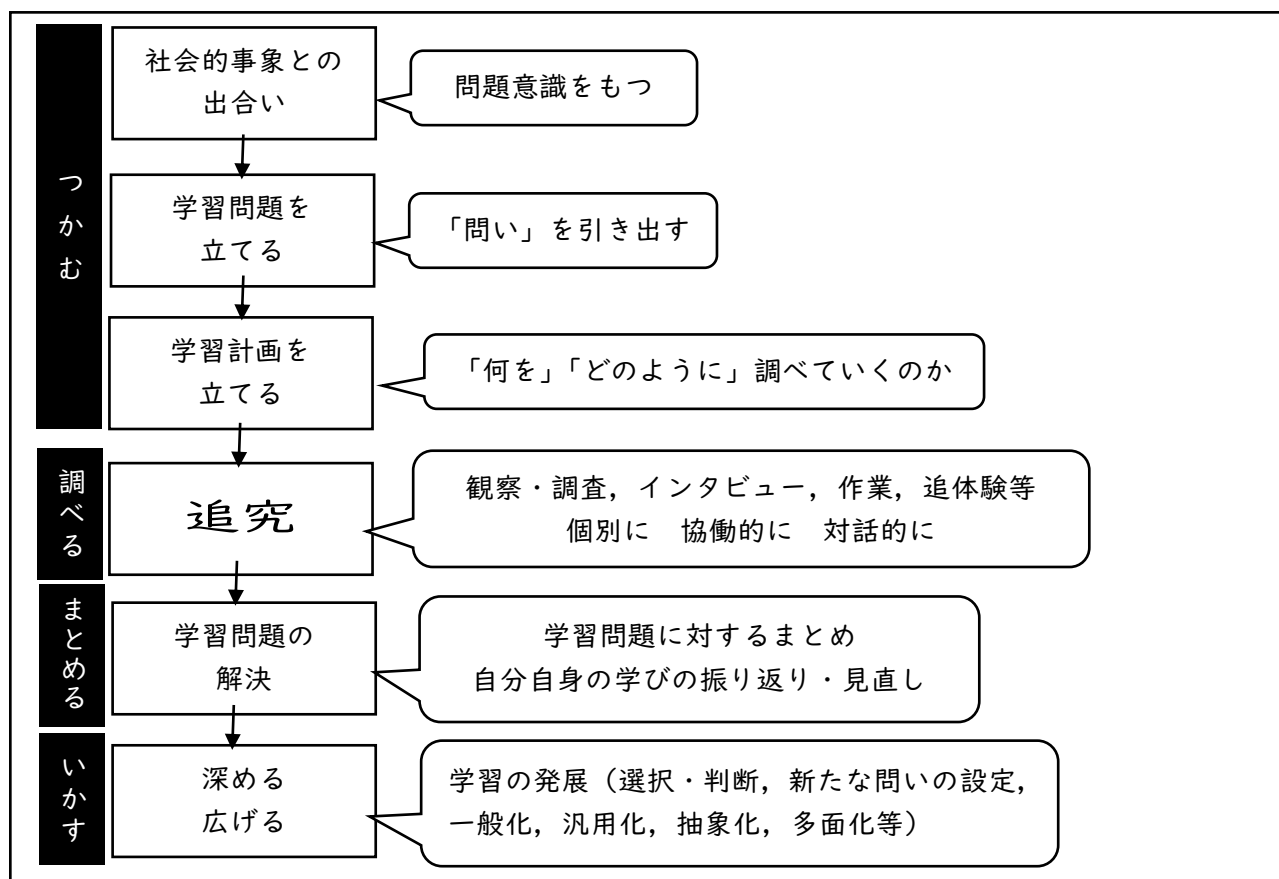
→・(コンマ)は、予想される子どもの反応や発言を記載する。その際、「時間軸」「空間軸」「関係軸」のどの社会的事象の見方・考え方からの反応や発言なのかを認識した上で子どもと向き合いたい。

【6】1時間のまとめ(□で囲まれた部分)を、「単元の評価規準」の、どの部分と照合するかを確認しながら設定する。

【7】単元全体ですべての「評価規準」を満たしているかを確認する。

【8】1時間のまとめ(□で囲まれた部分)の中で、「評価したことを記録に残す場面」については網掛けする。

【図表4】単元における問題解決的な学習のプロセス



研究内容2 学習活動の工夫

- (1) 社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動
- (2) 社会への関わり方を選択・判断する学習活動

(1) 社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動 **多角的**

多角的に考えるための「話し合い活動」

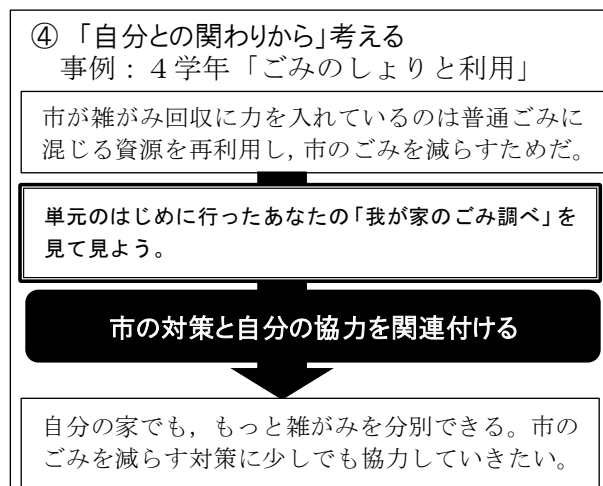
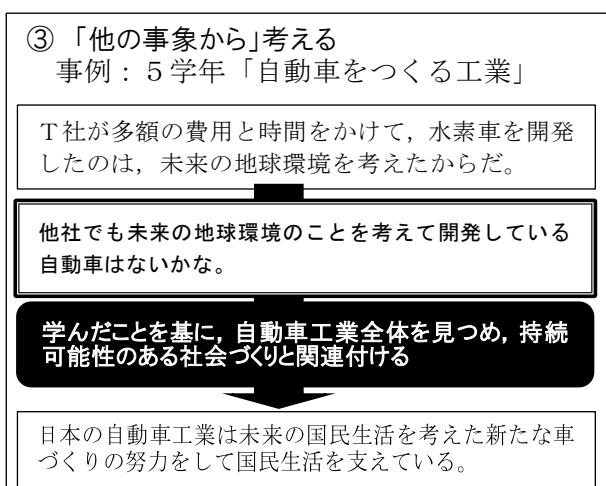
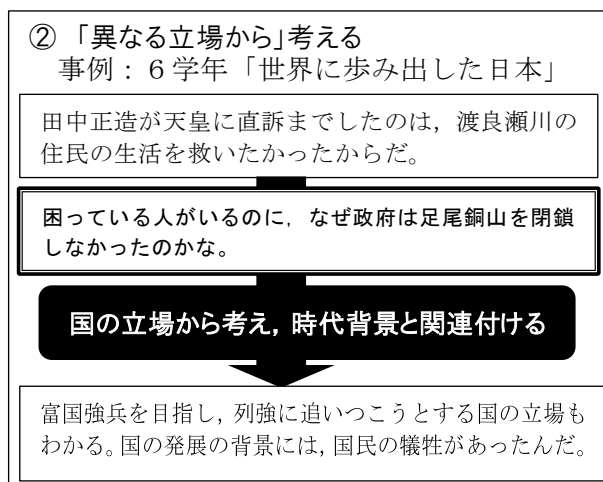
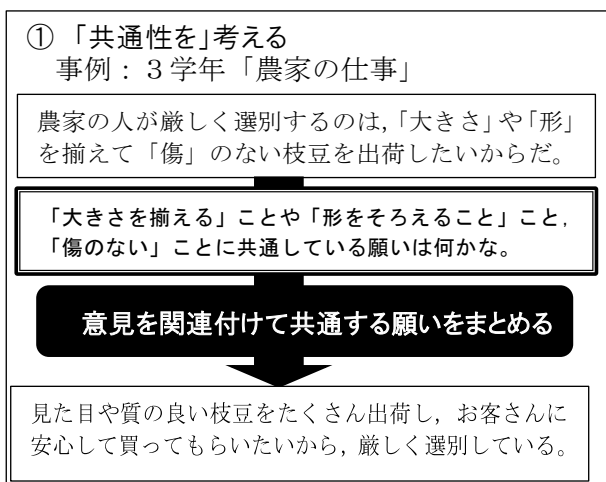
子どもたちが社会とのつながりを実感するためには、取り上げた社会的事象の概念的知識を獲得し、それを基に社会を見つめることが大切である。そこで、単位時間（「思考力、判断力、表現力等」を養う授業を中心として）の中で、社会的事象の特色や相互の関連、意味等について、対話的な学びを通して、様々な立場や意見から多角的に考える学習活動を意図的に設定することとした。

その際、それまで追究してきた内容を集約したり、複数の立場や意見を踏まえて考えたりすることができるように、その必然性を生み出す教師の発問を行うこととした。

【図表5】教師の発問の視点例

①「共通性を」「順序性を」考える 様々な立場や意見の共通性や順序性に着目し、社会的事象の意味についての考えを集約する。
②「異なる立場から」考える 様々な立場の人に着目し、社会的事象の特色や相互の関連、意味について考える。
③「他の事象から」考える 別の社会的事象に転化して一般化を図り、他の社会的事象との相互の関連を考える。
④「自分との関わりから」考える 自分と社会的事象との関わりを見つめ、社会的事象の意味と自分の生活との関連を考える。

【図表6】教師の発問の具体例

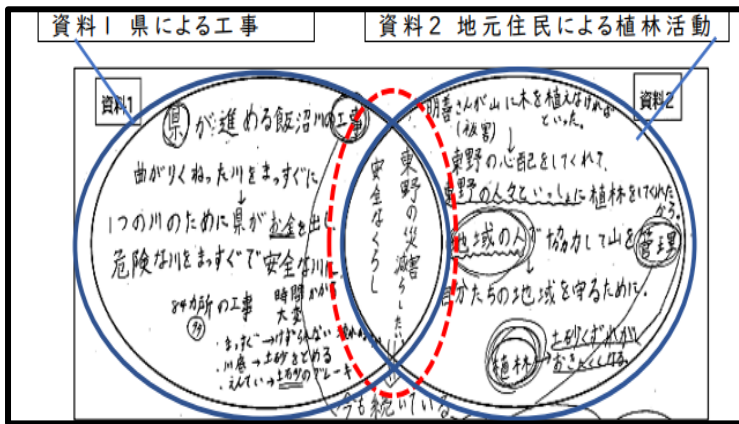


多角的に考えるための「思考ツール」

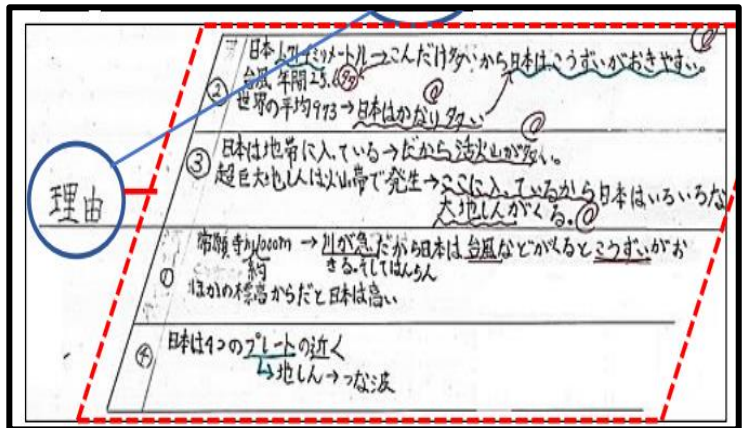
話し合い活動の中の「教師の発問」によって社会的事象を多角的に捉え深い学びにつなげる実践だけでなく、今後は資料追究時や話し合い活動の中で「思考ツール」を活用することで、「一人一人が多角的に考えられる学習活動」にも挑戦していきたい。以下に昨年度の実践の一例を紹介する。

思考ツール「ベン図」を活用した資料追究によって【図表7】のように、児童が2つの資料を追究しながら、自然な流れで共通点を見いだすことにつながる。また、思考ツール「くま手チャート」を活用することで、【図表8】のように学習問題について、複数の視点から考え始める姿につながっていく。思考ツール「クラゲチャート」は、【図表9】のように、クラゲの頭の部分に自分の主張や意見を書き、クラゲの足の先にある丸に根拠を書くことで、自分の主張や意見を創り出すために、情報や知識を整理しながら多角的に追究する姿につながっていく。

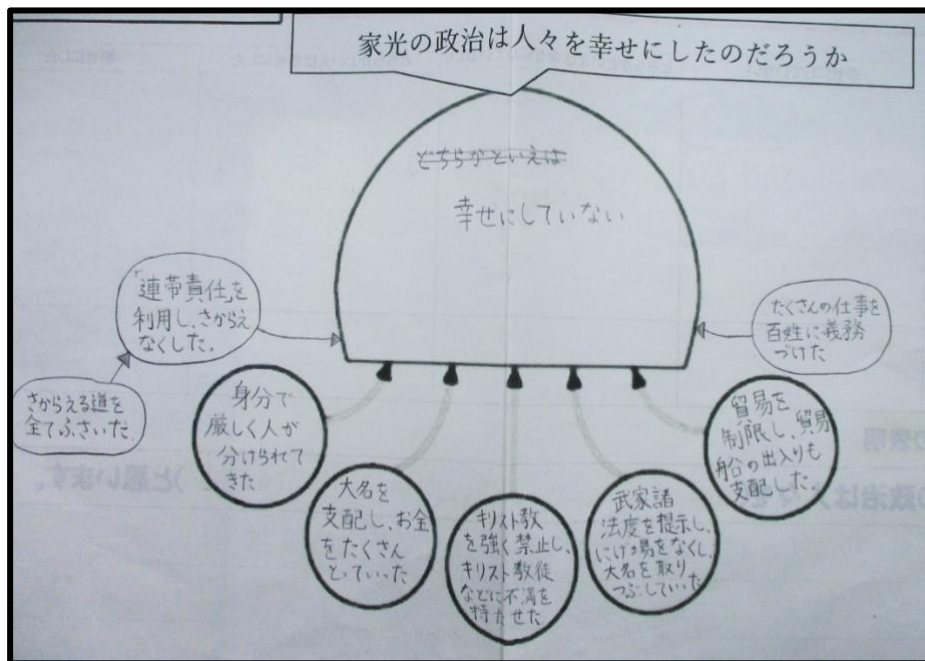
このように学習問題に応じて様々な「思考ツール」を活用することも、児童が社会的事象を関連付けて捉えたり、多角的に考えたりするための有効な手立てになると考えられる。今年度は「学習問題を見いだす学習活動」「資料から追究する学習活動」「考えをまとめたり、振り返ったりする学習活動」など様々な場面において積極的に活用していきたい。



【図表7】思考ツール「ベン図」



【図表8】思考ツール「くま手チャート」



【図表9】思考ツール「クラゲチャート」

(2) 社会への関わり方を選択・判断する学習活動 **選択・判断**

よりよい社会の実現を目指す子を育てるためには、社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて、自分自身の社会への関わり方を選択・判断する力を養うことが大切である。そこで、社会への関わり方を選択・判断する場を意図的に位置付けることを通して、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、「自分自身はどのように関わればよいか」「社会の在り方はどうあるべきか」等を考えることができるようにする。その際に大切なことは、社会への関わり方を選択・判断する授業を単元全体でとらえ、学習対象と自分とのつながりを意識しながら学習を進めることである。そうすることで、単元で獲得した概念的知識を活用しながら、社会とどのように関わっていくとよいのかという意識を育てていけると考えている。そこで、単元を通して行う選択・判断の授業の段階を【図表 10】のように整理した。

また、選択・判断の学習では、内容の枠組みに応じて、【図表 11】のような Type が考えられる。

【図表 10】 選択・判断の授業の段階

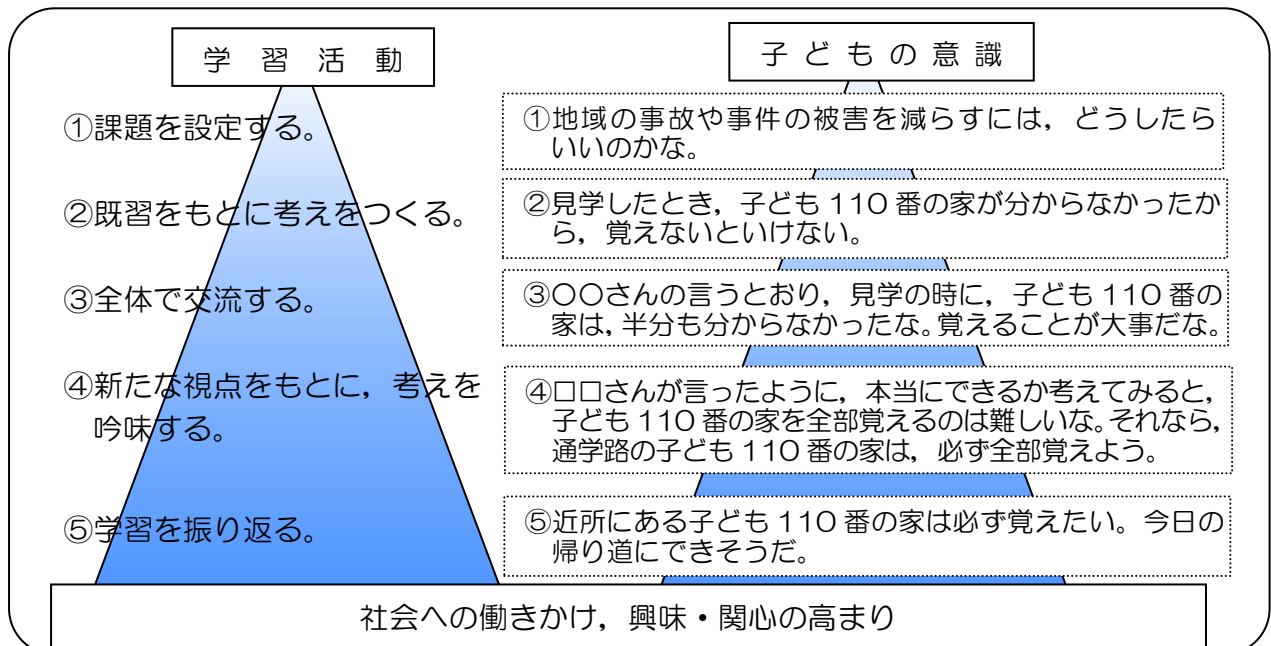


【図表 11】 社会への関わり方を選択・判断する授業の具体例

Type	方法	具体例
A	社会に見られる課題に対し、自分の関わり方を考える。	[第4学年 ごみのしよりと利用] ごみを減らすために、自分でできることは何か。
B	社会に見られる課題に対し、実際に行われているいくつかの働きの中から、選択する。	[第5学年 米づくりのさかんな地域] F社が今後も生産を続けていくためには、「品質の高い家庭用米」か「大量生産できる外食用米」のどちらを作るとよいか。
C	社会に見られる課題に対し、これからのよりよい社会の在り方を考え、提案する。	[第3学年 市のうつりかわり] 〇〇市を人が住みたくなるような市にしていこうためには、どうしたらよいか。

さらに、一単位時間の授業を、【図表 12】のように構成した。

【図表 12】 社会との関わり方を選択・判断する授業の構成例 (Type A)



- (1) 社会とのつながりに気付くことができる指導・援助と評価
- (2) 社会への関わり方を選択・判断する学習活動における指導・援助

(1) 社会とのつながりに気付くことができる指導・援助と評価

子どもが社会とのつながりに気付くことができるようにするために、本時までの「実態」、「学習状況」、「定着状況」と「学習後」の各場面において、指導・援助を明確にした。【図表 13】

【図表 13】場面における見届けと指導・援助

実態の見届け		
<ul style="list-style-type: none"> ・どのような考え方をするのか。(情的なのか、論理的なのか) ・どのような生活経験をし、既習内容がどこまで身に付いているか。 ・学習したことをどう活かし、広げようとしているのか。 		
学習状況の見届け		
場面	見届ける姿	主な指導・援助
把握課題	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような課題を解決すればよいかを明確になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「今日の学習は、理由（仕組み）について考える（調べる）といいよ」
予想	<ul style="list-style-type: none"> ・既習内容や生活経験、導入資料と関連付けて予想している。 ・社会的事象の見方・考え方を働かせて予想している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「前の学習や自分の生活と比べて（つなげて）みるとどうなのかな」 ・「〇〇という見方から予想するとどうなのかな」
追究	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な資料を選択し、事実に基づき、社会的事象の見方・考え方を働かせて、考えをもっている。 ・仲間の考えと比較・分類・総合したり、違う立場から考えたりして、多角的に追究している。 ・授業の枠組みや、選択・判断の規準に基づいて、考えたり話し合ったりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「どの資料から考えたのかな」「〇〇という見方から考えるとどうなのかな」 ・「～さんの考えと比べるとどう思ったかな」「～さんの立場から考えるとどうなのかな」 ・「単元の学習内容を基にして考えるとどうなのかな」
定着状況の見届け		
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・獲得した社会認識を基に、課題についてまとめ、深めている。 ・自分（既習内容や生活経験）や、仲間の考えとつなげている。 ・社会的事象の見方・考え方を働かせることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇という、新たな視点に気づくことができたかな」 ・「自分とつなげて考えることができたかな」 ・「立場が変わると見方が変わることに気付くことができたかな」
学習後の見届け		
学習後	<ul style="list-style-type: none"> ・関心を高めてさらに調べている。 ・学習したことを他者に伝えている。 ・自分にできることを実践している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習内容を掲示物として残し、調べてきたことをファイリングする。 ・実践している姿を紹介し、価値付ける。

評価について、特に「主体的に学習に取り組む態度」については、「2 内容」に「学びに向かう力、人間性等」に関わる事項が示されていないことから、学年の目標に照らし合わせて評価規準を設定しなければならない。

この観点は目標にも示されているように、「主体的に問題解決しようとする態度」と「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度」等を評価する。このうち、「主体的に問題解決しようとする態度」について、昨年度までは主に「授業の終末での振り返り」を評価場面と考えてきた。今年度からは、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）を参考に、評価場面を次頁【図表 14】のように広げた。これまでよりも多面的に子どもの姿をとらえ、上記の「指導・援助」と合わせて確かな価値付けを行うことで、主体的な問題解決する態度へとつなげていきたい。

【図表 14】「主体的に学習の問題を解決しようとする態度」の評価と指導

評価する姿	評価の場	教師の指導
見通しをもって自ら追究しようとしている姿	学習問題をつかむ・問題解決に向けて、予想を立てたり、解決までの見通しをもったりする 例：「火事するとき、消防士さんが現場で消火活動をしているんだと思います」 例：「教科書で調べたり、消防署の見学に行つて話を聞かせてもらったりすれば、解決できると思います」	予想の根拠となるような事象を事前に取り上げておいたり、出てきた素朴な予想を比較したり関連付けたりできるように促す。
学習状況を確認し、さらに調べべきことを考えている姿	単元の学習がある程度進んだ時点で学習状況を確認し、今分かっていることと、まだ調べる必要があることを考える。 例：「水がどこから、どうやって送られてくるかはわかったよ。だけど、川から汲み上げているなら、どうして蛇口から出てくる水はきれいなのかな…。調べてみたい。」	学習問題と学習内容を関連付けて考えるように促し、分かったことを整理する。一人の児童の新たな問いを全体で共有化できるように問い返す。
自らの学びを実感している姿	授業の終末で振り返りを記述する 例：「初めは、〇〇だったけど、□□ということが分かりました（できました）」 例：「ぼくは、〇〇が分かったので、□□なのだと思いました」	変容の見られる記述を価値付ける。
次の学習への見通しをもっている姿	授業の終末で振り返りを記述する 例：「単元の課題を解決するために、次は〇〇について調べてみたいです」	さらに調べるべきことを見いだしている記述や発言を価値付ける。

このような評価場面を意識して、単元を構想する際には、「授業終末の振り返り」だけでなく、「予想や計画を立てたり、自分の学習状況を見直したりする時間」を単元構成表に位置付け、主体的に問題を解決する態度として評価していくことも今後より大切にしていきたい。

「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度」については、「学習後の見届け」と併せて評価規準を考えていくことが大切である。カリキュラムマネジメントの視点からも、学習したことを社会科だけに留めるのではなく、学習後の児童の姿も評価し価値付けていくことが、よりよい社会の実現を目指す子を育てることにつながる。そこで、学習後の評価の場面や方法の例を【図表 15】のようにまとめた。

【図表 15】「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度」を評価する方法と児童の姿の例

方法	評価する姿
<ul style="list-style-type: none"> ・学習後の自分の姿を振り返る場を位置付ける。 ・学習した単元とその後に学習する単元とのつながりを示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が考えたことを実践したり、学習を広げたり深めたりしている姿

(2) 社会への関わり方を選択・判断する学習活動における指導・援助

社会への関わり方を選択・判断する学習活動において、教師には、次のような役割がある。

【教師の役割（指導・援助）】

- ①話し合いの必然性を生み出す（社会に見られる課題と自分たちとの関わりを示す）
- ②授業のアウトラインを描く
- ③選択・判断の規準を明確にする
- ④話し合いを焦点化し、方向性を決める
- ⑤社会にかかわろうとする姿を価値付ける

■単元全体に関わる指導・援助

① 話し合いの必然性を生み出す（社会に見られる課題と自分たちとの関わりを示す）

社会への関わり方を選択・判断する学習活動では、社会に見られる課題を自分との関わりで捉え、実感をもって話し合いをするために、「みんなと話し合って解決したい」という必然性をもたせることが大切である。この必然性を持たせる場面は、単元導入、概念的知識を基に社会を見つめる授業の終末【図表 10】、社会への関わり方を選択・判断する授業の導入等様々な場面が考えられる。また、子どもが必然性をもつことができるような方法や、それによる子どもの意識を【図表 16】にまとめた。

【図表 16】 選択・判断の授業における子どもの意識と具体例

方法	子どもの意識（必然性）	具体例
資料を提示する	社会に見られる課題について、解決方法を考えなければならない。	【第5学年 わたしたちの生活と森林】 日本の森林を守るために、大切なことは何だろう。
	未来の自分の生活のために、今考えておきたい。	【第4学年 自然災害から暮らしを守る】 災害から身を守るために、できることは何だろう。
学習前の自分を見つめ直す	（社会に見られる課題を解決するために）自分にもできることがあるかもしれない。	【第3学年 事故や事件から暮らしを守る】 地域の交通事故を減らすためには、どうすればよいらろう。
GTからの依頼を聞く	自分たちが考えることを通して、社会の役に立ちたい。	【第3学年 市のうつりかわり】 人々が住みやすい市にするためには、どうすればよいらろう。

② 授業のアウトラインを描く

社会への関わり方を選択・判断する学習活動では、その場の思いつきの判断や、科学的な根拠のない判断ではなく、それまでに身に付けた知識・技能や生活経験を基に行うことが大切である。そこで、選択・判断をする際には、「単元で習得した知識」「他教科や他の領域で身に付けた知識・技能」「生活経験」（アンケート等を活用して、生活経験を共有できる工夫が必要）を基にして選択・判断するという枠組みを決めることが必要となる。但し、初めから「この枠組みの中で判断しなさい」と強く規定するものではなく、生活経験も子どもが考える足場に含まれることから、発達段階や学習内容によっては、多少の広がりを持たせている。

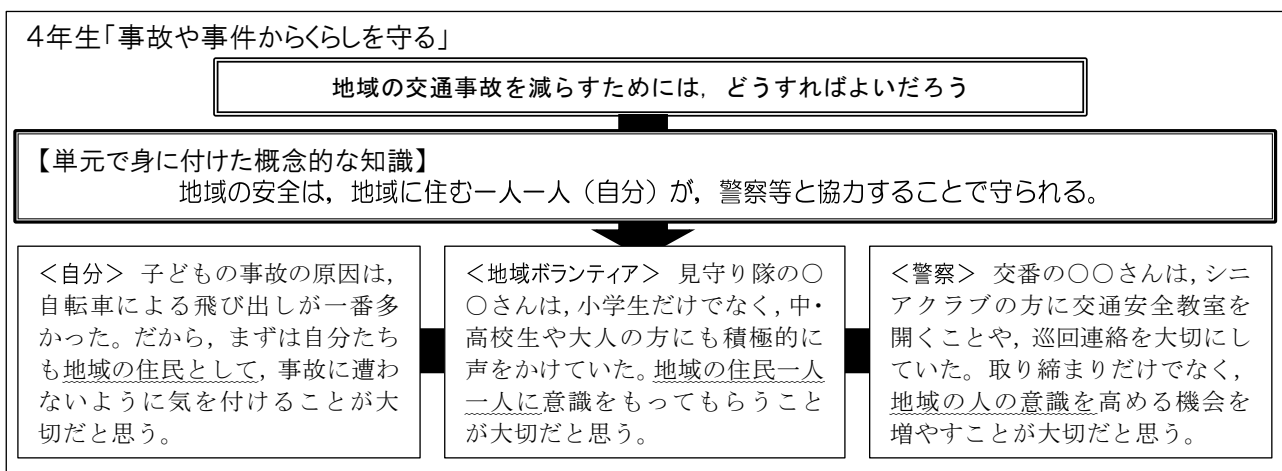
■単位時間における指導・援助

③ 選択・判断の規準を明確にする

社会への関わり方を選択・判断する学習活動では、子どもたちが話し合いを通して、考えを広げていくことが大切である。その際、子どもたち同士で、話し合った内容が適切かどうかを判断することが求められる。その規準は「単元で身に付けた概念的な知識」になる。(ここでいう概念的な知識とは、社会的事象の特色や意味を地理的環境、時代背景、社会背景とかかわらせて捉えたものであり、汎用性の高い知識) 教師は、この規準を明確に示すと共に、それに即した話し合いになっているかどうかを指導していく必要がある。そうすることで、ただの思い付きの考えではなく、単元の学習を生かした適切な話し合いをすることができる。

以下【図表 17】は、概念的な知識を基に、社会への関わり方を選択・判断した授業の一例である。

【図表 17】概念的な知識を基に、社会への関わり方を選択・判断した授業例



④ 話し合いを焦点化し、方向性を決める

社会への関わり方を選択・判断する学習活動では、答えのない問題について話し合うからこそ、教師は、子どもたちが考えを発表し合って終わるだけにならないよう話し合いを焦点化し、適切に価値付けていくことが求められる。そこで、教師が示す話し合いの方向性と、それを通して子どもたちに気付かせたい新たな学びの関係性を、次のように整理した。

【図表 18】話し合いの方向性と新たな学び

教師が示す方向性	新たな学び
立場を変える／立場を整理する	複数の立場から考えることで、見方・考え方の幅が広がる
単元を貫く課題と関わらせる	社会的事象の見方・考え方の働かせ方を身に付ける
今の自分の生活とつなげる	今の自分にできそうなことに気付く

⑤ 社会にかかわろうとする姿を価値付ける

教師は、話し合いを通して新たな学びに気付いた子どもたちの姿を、適切に価値付けることが大切である。子どもたちが選択・判断の学習活動を通して、自分のこととして社会にかかわろうとする姿や、社会的事象の見方・考え方を働かせて考えた姿を適切に価値付けることで、社会に関心をもち続け、社会への関わり方について考える力を育成することができる。

研究内容 1 – (2) にかかわる資料 (指導案作成例)

前文のフォーマット

① 単元名 「水はどこから」

② 単元の目標

飲料水を供給する事業について、経路、県内外の人々の協力などに着目して、見学・調査したり地図などの資料で調べたりしてまとめ、飲料水を供給するための事業の様子を捉え、その事業が果たす役割を考え、表現することを通して、飲料水を供給する事業は、安全で安定的に供給できるように進められていることや、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解できるようにするとともに、主体的に学習問題を追究・解決し、学習したことを基に地域社会の一員として、自分たちが協力できることを考えようとする態度を養う。

③ 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>① 供給の仕組みや経路、県内外の人々の協力などについて、見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、必要な情報を集め、読み取り、飲料水を供給するための事業の様子を理解している。</p> <p>② 調べたことを白地図や図表、文などにまとめ、飲料水を供給する事業は、安全で安定的に供給できるように進められていることや、生活環境の維持と向上に役立っていることを理解している。</p>	<p>① 供給の仕組みや経路、県内外の人々の協力などに着目して、問いを見いだし、飲料水を供給するための事業の様子について考え、表現している。</p> <p>② 飲料水を供給する仕組みや人々の協力関係と地域の良好な生活環境を関連付けて飲料水を供給するための事業の果たす役割を考えたり、学習したことを基に、節水に向けて、自分たちが協力できることを考えたり、選択・判断したりして表現している。</p>	<p>① 飲料水を供給する事業について、予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり、見直したりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。</p> <p>② 学習したことを基に、節水に向けて、自分たちが協力できることを考えようとしている。</p>

単元名

水は
どこから

単元学習前の子どもの意識

3年生の時には、火事からくらしを守るために、たくさんの人々が協力して被害を減らそうとしてくれていることがわかったよ。「自分の命や地域は自分で守る」ために、自分にできることも考えることができたよ。私たちの生活の安全や安心は当たり前ではなくて、自分も含めた地域みんなで守っていくものなんだ。

【第1時 学習問題を立てる】

私たちはどのような場面で水を使っているのだろう。

- ・私たちは、いろいろな場面で水を使っているということがよく分かったよ。
 - ・使っている量を比べてみると、特にお風呂や洗濯という場面で、たくさん水を使っているね。
 - ・一人でこれだけの水を使っているなら、〇市全体では、すごくたくさん水を使っているんじゃないかな…
- これだけ多くの水は、どこから、どうやっておくられてくるんだろう。【思—①】

【第2時 学習計画を立てる】

学習問題を解決するために、予想を出し合って学習計画を立てよう。

- ・きっと、雨が関係しているんじゃないかな。 ・私は、海や川の水を使っていると思うよ。
 - ・水道管という言葉聞いたことがあるから、そこから送られてきていると思うよ。
 - ・色々調べるとよいことが出てきたけれど、まずは水が直接出てくる蛇口から調べるといいんじゃないかな…
- どうやら水は、水道管から送られてきているみたい。でも本当にそうなのかな。水道管の先には何があるんだろう。色々調べたいことが出てきたけど、まずはいつも使っている蛇口から調べてみるぞ。【態—①】

【第3・4時 追究① 調査】

学校には、どこにどれぐらい「じゃ口」があるのだろう。

- ・190近くのじゃ口があったよ。水をよく使う場所にはたくさんあったよ。
 - ・じゃ口には管がつながっていて、たどっていくと受水槽があったよ。
 - ・受水槽の水はどこからどうやって送られてきているのかな…
- 蛇口の位置や数を白地図にまどめたら、学校全体に散らばっていることが分かったよ。いつでも、どこでも水を使いやすいからなんだね。【知—①】

【第5時 追究② 資料追究・インタビュー】

受水槽の水は、どうやって運ばれてきているのだろう。

- ・道路の下に 4000km以上の「配水管」があるんだ。先には何があるのかな…
 - ・配水管に異常があると、水が送られなくなってしまうんだね。
 - ・そうならないように日常点検をしたり、うめかえ工事を進めたりしているんだ。
- 長くて丈夫な配水管を通して送られているんだね。私たちのもとに必ず水が送られてくるのは、配水管をしっかり点検・工事してくれているからなんだ。【知—①】

【第8時 追究④ 資料追究】

水源地の水は、どこから送られているのだろう。

- ・資料を見ると地域の川からポンプで汲み上げているみたいだね。
 - ・地図を見ると、川は山の方から流れてくる。きれいな川や山だからこそ、私たちもおいしい水が飲めるんだね。
 - ・これで学習問題が解決したぞ。これまでの学習をまとめてみよう…
- 配水管をずっとたどっていくと、川や山という自然にたどりついた。色々な人や施設、自然を通して水は送られている。【知—①】

【第6・7時 追究③ 見学】

配水管の先は、どこにつながっているのだろう。

- ・配水管をたどっていくと、「水源地」という場所にたどり着いたよ。
 - ・水は機械で送られているけど 24 時間体制で異常を確認しているんだって。
 - ・自家発電機で、停電が起きても確実に水が送られるようになっているんだ。
 - ・この「水源地」の水は、一体どこから送られてきているのかな…
- 配水管の先には水源地があった。水源地の水は機械と人の力で 24 時間いつでも必ず送られるようになっているんだ。【知—①】

【第9時 まとめる・見直す】

水はどこから どうやって送られてくるのかまとめよう。

- ・24 時間どんな時でも水が使えるのは、色々な施設や人が協力して取り組んでくれているからだとわかったよ。
 - ・はじめに予想したとおり、「川」の水が送られてきていたよ。
- 私たちがいつでもあたりまえのように水が使えるのは、色々な人や施設や機械の働きのおかげだということがわかった。でも、川の水を使っているということは、水がよごれている心配はないのかな…【知—②】【態—①】

【第10時 学習問題の解決】

どうして、水道事業部の〇さんは、直接水を汲んできて 51 種類もの検査をしているのだろう。

- ・きっと、川には色々な目に見えない細菌がいるから、色々な機械を使って、検査しているんじゃないかな。
 - ・これだけの検査を定期的に行ってくれているから、私たちは毎日、必ずきれいでおいしい水が飲めているんだね。
- 川の水は汚れていないか少し心配になったけど、〇さんの 51 種類の検査の理由について考えて、私たちの生活を考えて、たくさん検査をしてきれいな水を送ってくれていることがわかったから、安心して飲むことができる。今まで以上に大事に使いたいな。【思—②】

【第11・12時 選択・判断】

水を大切に使い続けていくために、私たちにできることはなんだろう。

- わたしは、水を出しっぱなしで歯磨きをしているから、こまめに水を止めて磨きたいし、お家の人も洗い物やお風呂など色々な所で水を使っているから、水ってたくさんのおのおかげで送られてきているんだよ。大事に使おうって話をしたいです。【思—②】【態—②】

単元学習後の子どもの意識

私たちの生活にかかせない水は、地域の川から汲み上げられ、たくさん施設や人々の働きによって安全な水として届けられていることが分かった。限りある大切な資源だからこそ、使う時にはむだなく使ったり、地域の川そのものをよごさないようにしたり、私たちにできることをしていきたい。地域のみんな、家族のみんな、みんなが使う水を大切にしていかなきゃ。

【単元を貫く学習問題】

私たちの生活にかかせない水は、

どこから、どうやって送られているのだろう。